

私費留学生の進学意識と進路決定

——日本語学校在籍者へのインタビュー調査から——

比較教育社会学コース 張 梅

Motivation and decision-making process of foreign students aiming to enter Japanese universities: From the perspective of privately financed international students in Japanese language schools

Mei ZHANG

The aim of this study is to clarify the motivation and decision-making process of foreign students who have come to Japan to prepare to take university entrance exams, based on interviews with Chinese students attending Japanese language schools.

The research indicates that such students can be divided into four types; 1) those who have come to Japan without taking the national higher education entrance examination in China, 2) those who have taken the national higher education entrance examination in China, and then come to Japan, 3) those who have graduated from a two- or three-year college (*Dai-sen*) in China, and then come to Japan, and 4) those who have completed university education in China and then come to Japan. Each type has a different motivation for wanting to enter a Japanese university, and went through a different process in deciding which universities to apply to.

目 次

- 1 問題関心と研究目的
 - 2 先行研究の検討
 - 3 調査の概要
 - 4 分析—(1) 私費留学生の日本における進学意識の形成
 - 5 分析—(2) 私費留学生の日本における進路決定
 - 6 考察
-
- 1 問題関心と研究目的

グローバル化が進む今日、世界では200万以上の学生が母国以外の大学で学んでいる。さらに、各国は近年、優秀な人材確保などの目的で留学生受け入れに力を入れており、今後、このような国際的學生移動がさらに活発化していき、2025年における世界の留学生総数は769万人にも拡大すると予測されている（新田2007, p. 123）。

このような趨勢のなかで、日本もその例外ではなく、留学生の受け入れを積極的に進めている。日本では、1983年の中曽根内閣時代に「留学生10万人計画」が策定された。当時の計画は「知的国際貢献の発展と新たな留学生政策の展開」を目指していた。2003年に

は「留学生10万人計画」が実現され、それに引き継ぎ、2008年には当時の福田首相が留学生30万人を受け入れる方針を表明した。そして、2009年の「留学生30万人計画」の骨子によれば、この計画は「グローバル戦略」を展開する一環として位置づけられ、優秀な留学生の獲得と国際貢献を目標としている。

日本政府のこのような積極的留学生受け入れに对应して、現在数多くの海外留学生が日本に学んでいる。日本学生支援機構の調査データによれば、平成23年5月1日現在で、138,075人の留学生が日本の大学等で学んでいる。そのうち、アジアからの留学生が129,163人で、留学生全体の93.5%を占めている。なかでも中国からの留学生は87,533人で、全体の半数以上の63.4%を占める（日本学生支援機構2012）。ここから日本で学ぶ留学生の大きな特徴のひとつはアジアからの留学生、特に中国からの留学生が圧倒的に多いということであるといえる。

また、先行研究から、日本に来ている留学生の留学目的は学位取得が最多であることが明らかにされている（萩尾・岩男1988; 久村2002; 日本学生支援機構など）。したがって、留学生の日本における進学の達成は、留学生問題を論じる際の重要な課題である。

では、留学生はどのように日本の大学などに進学し

ていくのか。文部科学省(文部科学省高等教育局学生・留学生課2010)によれば、日本における私費留学生の大学等での受け入れには2通りの方法がある。1つ目のルートは外国での選考を経て、直接入学する方法である。2つ目のルートは渡日後、民間の日本語教育施設(以下本稿では便宜的に「日本語学校」と記す)に入学し、志望大学・大学院等の選考を受けて進学する方法である。

実際に、現在日本にいる私費留学生の多くは、日本語学校で1年から2年、日本語や日本文化などを習得した後に大学に進学している(佐藤2007)。例えば、日本学生支援機構の調査データによると、2010年度日本語教育機関卒業生23,843人のうち、日本で進学したのは17,195人であり、一年間2万人前後の留学生は日本語教育機関を経て大学などに進学しているという(日本学生支援機構2012)。このように、日本語学校は日本の留学生の受け入れに当たって重要な役割を担っていることが分かる。したがって、日本語学校に在籍する留学生の進学状況は、今後の留学教育を論じる際、避けては通れない問題となってくる。

以下、本稿は日本語学校に在籍する留学生に焦点を当て、私費留学生たちが日本での進学意識をどのように形成したのか、またどのように進学を決定していくのかを解明することを目的とする。

2 先行研究の検討

日本で学ぶ留学生の進学問題に関する研究は大まかに、大規模調査と個別実証研究の2種類に分類することができる。まず、大規模調査としては、日本学生支援機構が実施する「外国人留学生在籍状況調査」、「私費外国人留学生生活実態調査」、及び「外国人留学生進路状況・学位授与状況調査」が挙げられる。

「外国人留学生在籍状況調査」は、年に一回、日本の大学(大学院を含む)、短期大学、高等専門学校、専修学校(専門課程)および準備教育課程に在籍する留学生の在籍状況を把握することを主な目的として行われる大規模調査である。

「私費外国人留学生生活実態調査」は、日本で学ぶ私費外国人留学生の標準的な生活の状況を把握し、経済的実状などを明らかにするために、日本学生支援機構による支援事業の改善等の目的として2年に1度実施される調査であり、現在日本における最大規模の留学生調査である。当該調査では、主に生活実態を中心に調査が行われている。この調査から、日本への留

学の目的は、「学位を取得する」(54.6%)が最も多く、次いで「就職に必要な進んだ技能や知識を身につける」(54.0%)であること、また、日本を留学先として選んだ理由は、日本社会に興味があり、日本で生活したかったため(53.1%)が最多となっている(日本学生支援機構2010)。

「外国人留学生進路状況・学位授与状況調査」は、日本で学ぶ外国人留学生の進路状況と学位授与状況の把握を目的とした調査である。この調査結果によれば、毎年、多くの留学生が日本語教育機関から大学などに進学している。たとえば、平成21年度には、日本語教育機関卒業生18,909人のうち14,488人が日本で進学しており、平成22年度には、卒業生23,843人のうち17,195人が日本で進学している(日本学生支援機構2011,日本学生支援機構2012)。

以上、これらの大規模調査は、留学生に関する全体傾向の把握に役立っている。しかしながら、これらの調査は現状の粗い把握にとどまっているという限界もある。

続いて、留学生の日本での進学についての個別実証研究としては、管見の限り、挙げられるのは岡・深田(1995)、浅野(1997)、久村(2002)、山田(2010)のみである。

まず、中国出身の大学生243人と日本語学校生55人への意識調査(アンケート)の結果を比較した岡・深田(1995)では、日本語学校生は経済的問題や心理的問題を抱えながらも、日本語学校卒業後は日本の大学、専門学校に進学したいという強い進学意志があると示されている。

また、中国からの就学生13人を対象にインタビューを行った浅野(1997)によると、中国人の大卒の就学生は、日本での進学やそれに向けた日本語学習に高い関心を持っている一方、高卒の就学生の関心は、大学進学やそれに向けた日本語学習に収斂しないという。

そして、田園調布大学に入学実績のある日本語学校就学生にアンケート調査(有効回答931名、10の日本語学校)を行った久村(2002)は、以下の知見を提示している。外国人就学生の日本への留学目的はかなり明確で、「第一希望は4年制大学、次は専門学校、それでもだめなら日本留学経験をテコに、帰国して就職」という考え方が、日本語学校就学生の標準的な傾向である。(久村2002, pp. 119-128)

最後に、留学生の進学実態について検討した山田(2010)の研究(一つの日本語学校に在籍する62人の日本語学校生へのインタビュー調査)では、①調査対

象者の全員が日本の大学などに進学しようと考えており、そのほとんどが日本語学校卒業後に日本の大学に進学していること、②日本の大学などを受験する際に、一大学のみを受験しており、複数の大学は受験しない傾向があることが示されている。

以上の諸研究では留学生の進学問題について一定の成果をあげている。だが、留学生の進学意識の形成と進路決定についての検討はほとんどされていない。さらに、既存の留学生の日本での進学に関する研究では、留学生を一枚岩として捉える傾向が見られ、本稿で後述するように、来日前の学歴をもとに留学生を類型化したうえで、進学意識の形成と進路決定について検討する研究は、これまでほぼ実施されていないといえる。

3 調査の概要

本研究で資料として利用するのは、日本語学校に在籍する中国籍の私費留学生23名を対象として行った、インタビュー調査記録である。インタビュー調査は、筆者自身が2010年の2月から8月を中心に実施した。

中国からの私費留学生を研究対象とする理由は、以下の3点である。

第一に、日本語学校の在籍者のなかでも、中国人学生の割合が高いことである。

第二に、中国人学生といっても均質な集団でなく、内部の多様性があることである。

第三に、中国からの留学生の進学率が高いことである。佐藤(2007)によると、2006年の日本語学校から大学などへの進学率は、国・地域によりかなり異なっている。中国の場合、88%と高く、ほとんどの者が大学等へ進学している。ちなみに、韓国は40%、台湾は54%となっている(佐藤2007, p.20)。

調査対象へのアプローチについては、まず各日本語学校の知人に調査を依頼し(知縁法)、その後はその知人に紹介を依頼し同じ学校の別の対象者にコンタクトを取るという雪だるま式サンプリング(snow-ball sampling)を採用している。

質問項目については、「なぜ日本に留学しようと思ったのか」、「日本での進学はどのように計画しているのか」、「実際どのように進学先を決定しているのか」という3点を中心に設定している。インタビューは、必要に応じて日を改めて2,3回繰り返した。

調査時間の大半は1時間程度を目安に行ったが、例外として短い対象者は30分程度が2名、長い対象者

は2時間から3時間半程度が3名ほどあった。データは、録音の許可が出たものは録音したものを起こした。本研究では、倫理的問題を考慮した上で、調査対象者のプライバシーを保護するため、情報提供者はすべて仮名にしている。調査対象者の基本属性を以下の表で簡潔に示しておく。

4 分析一(1) 私費留学生の日本における進学意識の形成

以下、本節では留学生の日本における進学意識の形成について検討する。今回の調査結果から、調査対象者の中国国内での学校経験、すなわち学歴によって、進学意識の形成経緯が大きく異なっていることが明らかになった。また、浅野(1997)で検討された高卒と大卒の間に差異があるだけでなく、高卒の中にも、中国国内で大学受験を経験した事例と経験していなかった事例との間、そして大卒の中にも、大専卒と4年制大卒との間にはさまざまな差異があることが明らかになった。さらに、進学意識の形成には学歴間で差異があるのみならず、次節で分析する進学決定についても上述した4つの学歴別で大きく異なっていることが見られた。

よって、以下の本稿では、上述の学歴別(高卒大学未受験タイプ、高卒大学受験タイプ、大専卒タイプ、4年制大卒タイプ)に、留学生の日本における進学意識の形成と進路決定について分析していく。

なお、高卒大学未受験タイプは、高卒で、中国の全国大学統一入学試験(原語:「全国普通高等学校招生入学考試」, また「全国大学統一入試」)を受験していなかった留学生を指す。高卒大学受験タイプは、全国大学統一入学試験を受験していた高卒の留学生を指す。なお、大学を中退した事例もこのタイプに含めることとする。大専卒タイプは、中国の2年制もしくは3年制の、主に専門分野の教育を行う教育機関(日本の短大のような教育機関で、学位は授与されない)を卒業した留学生を指す。4年制大卒タイプは中国で通常の大学を卒業した留学生を指す。

4.1 高卒大学未受験タイプの日本における進学意識の形成

このタイプに該当する事例は、高校卒業後、中国国内での進学意識が薄く、海外の高等教育を受ける意識が強いという共通した特徴を持っている。彼らは中国の大学に進学すると考えていなかったため、大学に進

表 1 調査対象者の基本属性

学歴	事例	性別	来日年齢	来日時期	親職・学歴	兄弟・姉妹	進学時期	進学先	
高卒 大学 未受 験	A	男	19	2008年10月	父院卒/母院卒	一人っ子	2011年4月	国立・理系	
	B	男	19	2009年10月	父院卒/母院卒	一人っ子	2011年4月	国立・理系	
	C	女	19	2010年10月	父大卒/母MBA	一人っ子	2011年4月	国立・理系	
	D	男	21	2009年4月	父大卒/母大専卒	一人っ子	2011年4月	専門学校・声優	
	高卒 大学 受 験	E	女	20	2009年4月	父高卒/母高卒	一人っ子	2011年4月	私立・文系
		F	女	19	2009年4月	父大卒/母高卒	一人っ子	2011年4月	私立・文系
		G	女	20	2009年4月	父大卒/母大専卒	2人	2011年4月	私立・文系
		H	女	20	2009年10月	父中卒/母高卒	3人	2011年4月	専門学校・日本語
		I	女	19	2009年7月	父大専卒/母不明	6人	2011年4月	専門学校
		J	女	20	2009年4月	父大卒/母高卒	2人	2011年4月	私立・文系
		K	男	19	2009年3月	父高卒/母不明	一人っ子	2011年4月	私立・文系
		L	女	21	2009年4月	父中卒/母中卒	3人	2011年4月	私立・文系
		M	男	19	2009年10月	父大専/母不明	一人っ子	—	帰国
大卒	大専	N	男	22	2009年4月	父高卒/母高卒	一人っ子	2011年4月	専門学校・自動車関係
		O	女	22	2009年10月	父高卒/母中卒	3人	2011年4月	専門学校・自動車関係
		P	女	23	2009年4月	父中卒/母小卒	3人	2011年4月	私立・文系
		Q	女	23	2009年10月	父中卒/母中卒	2人	—	結婚
	4年 制 大卒	R	男	23	2010年4月	父高卒/母高卒	2人	2011年4月	国立大学院・文系
		S	男	22	2009年9月	父大卒/母大卒	一人っ子	2011年4月	専門学校・ビジネス
		T	男	24	2010年3月	父中卒/母不明	一人っ子	2011年4月	私立大学院・文系（研究生）
		U	男	23	2010年3月	父中卒/母中卒	3人	2011年4月	私立・文系
		V	男	23	2009年9月	父大卒/母高卒	一人っ子	—	帰国
		W	女	23	2010年4月	—	2人	2010年10月	県立大学院・文系（研究生）

学する際に必要な統一試験も受けていない。たとえば、事例Cは以下のように語っている。

「大学に行くつもりもないので、高考（筆者注：大学統一入学試験のことは中国で高考ともいう）を受ける必要もない。」（事例C）

また、今回の調査対象者のほとんどは、高いレベルの教育を受けたいと語っている。すなわち、日本の国立大学あるいは国際的に有名な私立大学への進学に希望が集中している。

「高考を受け、大学に進学するという道は、何といたらいいのかわからない。狭いと思う。そして国内の大学のレベルはちょっとね。母は高校の先生で、父は大学の先生。だから中国の大学のよくないところについて私は知っている。もともと留学と思っていたが、日本に来るとは思わなかった。アメリカやシンガポールとか、一番行きたいのはシンガポール…日本はアジアだけでなく、世界中では先進国だし、また日本に来る留学生も多く、日本留学を経験した父母の生徒を見ると、なかなかいい。だから…視野を広げるために。」（事例B）

「（前略）まあ、一応国立の中から選ぶつもり。帝

国大学。（筆者補足：日本留学試験の）成績でどの学校を受けるか決める。」（事例B）

「それはもちろん日本のトップレベルの大学に行きたい。そうじゃなければ留学の意味がない。」（事例A）

このように、最初から海外での進学を志望している高卒大学未受験タイプの中には、旧帝国大学や有名な私立大学だけではなく、日本の漫画・アニメの影響を受け、本場の日本で漫画・アニメを学びたいという事例も存在している（事例D）。彼はもっと実技を学びたいため、大学ではなく専門学校で学ぶ希望を最初から持っていた。以下、このタイプに該当する事例の日本における進学意識の形成を確認していく。

「（筆者補足：中国の）教育体制が良くない。学生たちは勉強しているけど、勉強が好きで勉強しているわけではない、そのような人が少ない。これは私の個人的な偏見かもね。私は勉強が好きではない。大学の教育体制もよくないと思う。」（事例D）。

なお、このタイプに該当する事例は海外の高いレベルの教育を求めているため、比較的早い段階から留学の準備を始めていることが確認された。今回の調査

対象者は遅くとも高校段階から、日本留学のために日本語の勉強や日本の大学等の情報収集を始めている。例えば、中国での大学受験と海外留学の準備は同時に進行できないと認識した結果、日本語の勉強に力を入れていたと語る事例もある。

「どうせ中国の大学に行かないから、受験準備はやらなくてもいいと思った。逆に、やっても意味がない、むしろ日本のことについてもっと知りたかった。その時間を使って、日本語の勉強をしていた。」(事例A)

以上、高卒未受験タイプの日本における進学意識について検討した。事例Dはアニメ・漫画の影響で留学先として最初から日本を選んだが、事例Dを除き、ほかの事例は日本を含めた先進国、あるいはトップレベルの高等教育を受けたいという特徴が見られた。

まとめれば、このタイプにおいては、高いレベルの高等教育を求めている特徴は共通している。また、彼らは日本を留学先として決めた後、母国において日本の大学への進学を積極的・戦略的に準備していたことが分かった。具体的な進学計画を尋ねたところ、このタイプに該当する事例は声優を目指す事例Dを除き、旧帝国大学あるいは有名な私立大学への進学傾向が見られている。

4.2 高卒大学受験タイプの日本における進学意識の形成

このタイプに該当する事例は、前述したタイプと同じく高卒の学歴で日本に来たが、彼らは中国国内で大学受験を経験し、日本留学はその受験の失敗がきっかけになっている。すなわち、彼らは中国国内で一回大学を受験したが、「好きな学校に入れなかったので、留学したいです。」(事例E)と事例Eが語るように、大学に行けなかった、あるいは志望する大学には行けなかったことで留学を決意し、日本における大学等への進学意識が形成されたという。日本を留学先として選んだ際、日本留学はほかの国に比べて比較的費用を抑えられることが大きかったという。

「正直にほかの国にも考えていた。しかし、欧米だとなんかお金持ちたちの行くところと感じている。やっぱり日本とかは最初にかかる費用は安いから。」(事例H)

さらに、彼らは母国で受験失敗を経験したため、日本での受験に大きな希望を託している傾向が見られる。

「最近はいいい会社に入るにはいい学歴が必要だとよく言われている。だから、私はいいい大学卒の人には及ばない、またいい家庭背景の人にも及ばない、だから日本に来て、日本の学歴を持って仕事を探したい。少なくともこっちは日本の大学卒だもんね。でも最近では留学生も就職が難しいから、少なくともある程度の大学卒じゃないと、留学生であったことだけでは足りない。まあ、私たちは厳しい時代に生まれてきたから、しょうがないね。」(事例F)

このように、このタイプに該当する事例はもともと海外留学をするつもりはなかったと推察できる。また、このタイプの留学生は、自国で大学受験後に初めて留学を考え始めたため、留学のための準備もそれ以後に開始している。そのため、日本語能力をほとんど持たないことから、日本で大学に進学するために、2年間ほどの日本語学校での勉強を通して、大学受験に必要な日本語力を身につけようとする傾向が見られる。

「みんな日本語できないから、同じスタートラインに立っている。2年間しっかり勉強して、今度は日本でいい大学に進学したい。」(事例K)

具体的な進学計画については、多くの事例が有名な大学への進学を希望すると語っていながらも、進学先の選択について漠然とした考え方をしていることが窺える。

「国立でも、私立でも、日本はいい私立大学もあるから。特に文系なら、必ず国立がいいとは言えないと思う。いい学校なら、国立か私立には関係ない。大学のランクづけて進学する大学を決定する。まあ、東京なら、上からの順番で、受けられる大学を受けて、合格した大学から選びたい。」(事例E)

事例Eは国立・私立には関係ないと語っているが、事例Eとは違って、多数の留学生はできれば国立大学に進学したいと語っている。その理由として、国立大学は私立に比べて学費が安いこと、また国立は海外でも高い評価を得ていることが挙げられている。中に

は、自分の国での大学進学より、日本で大学に進学するのは難しくないと認識している者もいることが窺えた。

「国内の大学を受験するのはなかなか難しい。日本の大学は入りやすいと聞いたから、とりあえず日本で大学に行って、卒業したら就職したい。」(事例L)

以上の分析のように、高卒の学歴で日本に留学に来ている留学生は、自国での大学受験をしたかどうかによって、日本での進学意識の形成経緯に大きな差異が見られた。総じていえば、全員が日本で学歴を取得したいことは共通しているが、先述した高卒大学未受験タイプには、従来のエリート留学の特徴が見られ、自国の高等教育よりも高いレベルの高等教育を受けようとする意識が強い。それに対し、後者の高卒大学受験タイプは、必ずしも留学を積極的に考えず、自国での失敗が留学のきっかけとなっていることが確認された。すなわち、後者にとって、日本留学は費用的に安く、また日本の大学に進学しやすいなどの理由で日本での進学意識が形成されていた。

4.3 大専卒タイプの日本における進学意識の形成

今回の調査対象者の中で、このタイプに該当する留学生は、中国の大専で日本語を専攻している事例が多く占めている(4事例の中に3事例)。

彼らが日本留学を決めた理由としては、日本語力を上げたいことや学歴を取得したいことがあげられる。このタイプの留学生は、大専卒業後ただちに留学するのではなく、就職活動あるいは就職経験を持つ者がほとんどである。しかしながらその中国での就職活動について苦勞していたと語っている。その苦勞の理由は、「3年間勉強したけど、理解はまあまあだけど実際に日本語は全然話せない。日本語についての仕事を探したけど、やっぱりだめ」(事例N)、また「一流大学の卒業生も就職できないから、大専は無理だよ。最初から騙された」(事例Q)などの例のように、日本語力と学歴のデメリットが挙げられる。そのため、大専卒タイプの学生は日本留学を通じ、日本語の上達のみならず、大専より高い学歴、すなわち大学あるいは大学院の学歴を手に入れたと考えている。

また、中国の大専で日本語を専門していた事例は、日本語については一定の自信を持っていた。

「基礎は勉強してきたから、あとは耳と口が慣れ

ば、会話をいっぱい練習したら、日本語は大丈夫。多分いい点数を取れる。」(事例O)

このように、日本語の勉強経験を持つことで、彼らは同じく日本語学校に在籍している留学生に比べ、優勢感を持っているとも語っている。そのため、比較的上位の大学・大学院を目指す傾向が読み取れる。

「日本語なら、ほかの留学生に比べて、かなり有利だと思う。今度こそ就職に有利な学歴を手に入れたい。」(事例N)

このタイプの中には、大学への進学希望を持つ留学生もいれば、大学院への進学希望を持つ留学生もいる。特に女性の事例(事例Oと事例P)は、年齢的なことを意識し、できれば大専の学歴を認める大学院に進学し、早く卒業して就職したいと語っている。

「年齢的にも結構いい歳だから、大学だと、また4年間かかる。卒業したらもう30歳近い。早く卒業して働きたいから、できれば大学院に進学したい。」(事例P)

また、具体的な進学計画については、日本の大学院の情報などについて詳しくないことが窺える。たとえば、事例Oは大学院への進学を希望しているが、実際に大専から直接進学できる大学院について聞くと、「留学仲介の先生から直接進学できる大学院はたくさんあると聞いたから」(事例O)、また「あると聞いたけど、まだ調べてはいない」(事例N)といったように、大学院の募集状況についての知識は漠然としている。

4.4 4年制大卒タイプの日本における進学意識の形成

4年制大卒タイプに該当する事例は、大専卒タイプに該当する事例と同様、大学で日本語を専攻していたか、あるいは第二外国語として日本語を勉強していた事例がほとんどであった。しかし、先に見た大専卒タイプは日本語レベルと学歴等の理由により就職面で苦勞していたため日本での進学意識を形成していたが、4年制大学タイプに該当する事例では、そのような語りはなく、むしろ大学在学中から留学意識を形成していたという特徴が際立つ。全体的に、このタイプの留学意識の形成は多様である。

たとえば、日本で修士号を取った後、地元の大学で

日本語を教えたいと考えている事例Uは、まず将来の就職のことについて以下のように語っている。

「仕事ならあるよ、日本語関係の仕事はたくさんある。しかし、もっとよい仕事を見つけないなら、例えば私のように大学の先生とかになりたいなら、やっぱり日本留学のほうが有利だと思う。」(事例U)

さらには、日本で学歴取得のメリットについて次のように述べている。

「日本で比較的「いい」大学の修士号を取得したら、私の感覚では、就職も簡単にできると思う。大学での就職なら、博士号を取ったらもっと有利だろう。」(事例U)

また、このタイプの留学生の留学目的は必ずしも学歴を取得することではない。日本語を勉強することを通じて、日本社会、日本文化について興味を持つようになり、日本での生活体験を求めている事例も存在している。

「お姉さんは日本に6、7年間の留学経験を持っている。話を聞いたら、面白いから、じゃ、日本に行こう。それで来てしまいました。」(事例S)

このように、このタイプにおいては、大学院で修士号・博士号を取って、将来は「いい仕事」に就きたいという傾向や、日本語を勉強したことで、日本に行ってみたい・海外で住んでみたいと思い、日本留学を決めたという傾向が見られた。

日本における進学について、このタイプに該当する事例は全員が大学院に進学したいと語っており、勉強の雰囲気がいいことと学費が安いことといった理由を挙げて国立に進学したいと語る事例も多い。また、彼らはすでに一定程度の日本語能力を持っているため、日本語学校を「半年、あるいは1年間」(事例R)で卒業したいと語っている例に見られるように、できるだけ早く大学院への進学を希望する事例が多かった。

そして、具体的な進学計画については、この大学に進学したい、この分野を学べる大学に行きたい、この先生のところに行きたい、というように具体的に語っている。留学生の語りからは、志望する進学先はある程度決めていることも確認された。

以上で確認してきたように、4年制大学卒タイプに

該当する事例は、前述した大卒卒タイプと同様に、日本語の勉強が大きな留学のきっかけとなっている。しかしながら、大卒卒タイプを含めたほかのタイプに該当する事例とくらべると、その進学意識の形成は学歴の取得と日本語レベルアップ以外にも、海外生活を体験したいといった多様性を呈していることが分かった。

5 分析—(2) 私費留学生の日本における進路決定

前章の分析では、調査対象者全員が日本での進学意識が強いことが明らかになった。また、高卒大学未受験タイプの事例Dを除く、他の事例の進学希望は日本の大学もしくは大学院に集中していることも明らかになった。それでは、留學生はどのように進路を決定していくのだろうか。本章では、彼らの進路決定について分析する。結論を先取りすれば、4つのタイプの中で、高卒大学未受験タイプに該当する留学生の進学状況がもっとも順調であり、ほかの3タイプにおいては、大学・大学院以外にも、専門学校に進学した事例、退学・帰国した事例といった多様な進学実態が観察された。

5.1 高卒大学未受験タイプの進路決定

このタイプに該当する4事例は、1事例が声優養成の専門学校、残り3事例は大学への進学を志望していたことを前章で確認した。実際の進学状況を確認すると、1事例が声優養成の専門学校への入学が決まり、ほかの3事例は国立大学に進学した。特に大学に進学した事例は、トップレベルの大学への進学を目指していることが前章の分析で明らかにされたが、彼らの中でほとんどの留學生が旧帝大に進学した。

このタイプの中で声優の専門学校に進学したいと来日前から計画していた事例Dは、進学したかった専門学校しか受験していない。一方、大学進学を志望していた事例は国立大学を集中的に受験し、また、数多くの大学を受験する傾向が見られた。以下、詳しく見ていこう。

事例Aは来日前、数学や物理学を勉強したいと考えていた。進学先について大きなこだわりはないが、これらの専門の水準が高い大学なら進学したいと考えていた。Aさんは2010年2月を中心に、6つの国立大学を受験した。大学の試験時間を調べ、試験時間が重なっていなければ、とりあえず願書を出したと語っている。

「すべて不合格とかはないと思った。必ずどこかに受かる。不安はない、完全にないでもないけどね。応募した大学は、大体先輩（筆者補足：高校の）がいる。私の成績は結構よかったから、大体受験したら受かる。（後略）」(事例A)

事例Bも事例Aと同じく、多数の国立大学を受験していた。多くの大学を受験する理由について以下のように語っている。

「とにかく受験そのものを体験してみたかった。練習みたい…いや、練習とは違うかも、まあ、自分の実力も確かめたいってことかなあ。」(事例B)

「受験する学校が多ければ選択肢も増える。万が一何かあったら受験できなくなることも絶対ないとは限らないし、一応、保険のために、いろんな大学に出願した。」(事例B)

前節でも分析したように、このタイプに該当する留学生はもともと母国での進学意識がないため、高校段階から積極的・戦略的に海外留学を準備していた。そして来日後、日本語を勉強し、実際に進学する際、特に苦労していないことが確認された。

5.2 高卒大学受験タイプの進路決定

前章で分析したように、高卒大学受験タイプに該当する9事例は全員が日本の大学に進学することを希望していた。さらに、彼らが希望する進学先は、「いい大学」に集中している傾向が見られた。実際に彼らの進学先を確認すると、日本の大学に進学したのは6事例で、残りの3事例は1事例が帰国、2事例が専門学校に進学した。

まず、日本の大学に進学した事例を見ていこう。できれば国立大学に進学したいと語っていた事例も多かったが、実際には全員が私立大学に進学した。インタビューの中には、日本語学校で日本語などを勉強しているうちに、自分の成績では国立大学に進学するのが無理だと認識した事例も存在している。たとえば事例Fがそれに該当する。

「私の成績では国立は無理だと思う。みんな国立に行きたいから、国立の競争が激しい。だから私立を受けた。」(事例F)

事例Fのように、国立をあきらめ、自分の成績で合格できそうな私立大学を探し、それらの大学を受験

し、合格した大学から進学先を選ぶ事例が多く存在している。

来日前、「日本は大学の数が多い」(事例L)、「大学全入時代と称されていたことから」(事例H)、「大学への進学を甘く考えていた留学生が多く存在していることがインタビューから把握された。来日後に、このような日本の大学についての認識が、現実とは大きく異なることを知り、自分の成績に即して受験する大学を選ぶ留学生も多い。また、成績だけでなく、経済的なことを配慮し、受験校数を控えていることも窺える。

「自分がどのような大学にいけるのが正直分からなかった。自分の成績と先生の推薦で、この学校を選んだ。それと経済的にも多くの大学を受ける余裕がない。一つの大学を受験するのに3、4万円もかかるから、合格したらほかの学校についてはもう考えていなかった。」(事例J)

このように、多くの留学生は自分の成績や経済的状況を配慮しながら、受験する大学を選んでいる。

他方、元々大学に進学したいと計画していた事例Hと事例Iは、大学ではなく、専門学校に進学した。さらに、この2事例が専門学校に進学した理由は異なっていることも分かった。

事例Hは、中国にいた時には、専門学校についてステレオタイプの見方を持っていた。専門学校について「大学に行けなかった人たちがいくところ」、「専門なら、国内でも行けるし、わざわざ日本に来る必要がない」(事例H)と語っていた。しかし、来日後に、日本の専門学校について認識し直したという。

「来る前は大学しか考えていなかった。しかし、こっち（筆者注：日本）に来てから、専門学校もいいかもと思うようになった。技術を身につけることも大事…みんなは大学に行くけど、でも文系なら、（筆者補足：大学の教育）はそんなに実用性もない…」(事例H)

「私が勉強したいことは、やっぱり専門学校でしか勉強できないと思う。国立なら別だけど、一般の大学より、専門のほうがいろいろ勉強できる。ネットで調べたてみたら、専門学校の（筆者補足：教育）が充実している。」(事例H)

事例Hは洋服のデザイナーになりたいため、都内にあるデザイナーの専門学校に出願し、合格するとすぐ

入学手続きをした。このように、事例Hは自分の学びたいことは、大学より専門学校のほうがより詳しく学べるということで、積極的に専門学校への入学を選んだが、他方の事例Iの専門学校への進学理由は、事例Hとまったく異なっている。

事例Iは私立大学の募集時期に家の事情で帰国したため、進学したい大学への応募を逃した。

「まあ、また募集している大学はあるけど、誰でも入れる大学しかなかった。そのような大学に行っても、何も勉強できないらしい。だからあきらめた。」(事例I)

「ほかの私立も全くないわけではない。けど、帰国でお金もたくさん使ってしまったって、受験にたくさんのお金を使う余裕がない。学費とかもたくさんだし、色々考えてあきらめた。」(事例I)

行きたい私立大学の募集が締め切られていたため、事例Iは募集時期の遅い国立を1校受験したが、不合格だった。しかしながら、事例Iは日本語学校にすでに2年間も在籍しており、進学先を見つけなければ、日本での在留資格が無くなるという。それで、事例Iは在留資格を確保するため、専門学校への進学を選び、また1年後に大学を受験すると語っている。

「一年間頑張ってみて、いい成績を取って、学費の安い大学(筆者注：国立)に進学したい。」(事例I)

前述したように、日本で学ぶ留学生の多くは、来日後、日本語学校で一定期間の勉強を経て、大学等に入学している。日本語学校に在籍する留学生の在留期間の更新は、大学などに在籍する留学生の在留期間の更新より短く、6か月または3か月ごとで、普通2年までしか延長を認められない(岡・深田、1995:47)。事例Iのように、日本語学校に2年間在籍していたケースは、次の進学先が決まらなければ、在留の延長資格が無くなる。したがって、事例Iはとりあえず専門学校に入学し、在留資格を確保した上で、翌年度大学受験を目指している。

最後に、このタイプに該当する事例のうち、事例Mは日本語学校を卒業後、進学せず、帰国した。事例Mは帰国した理由について、「日本語も上達してないし、学費も高くて、払うのがもったいない」(事例M)と語っている。来日後、日本語の成績はなかなか向上せず、また、自分のアルバイト代で学費を稼いでいるが、

アルバイトと勉強の両立に悩んでいた。それに加え、大学に行ける自信もなくなり、夏休みに一時帰国のつもりだったが、事例Mはそのまま日本に戻らず、結局日本での大学進学をあきらめた。

「大学に行けるなら行きたい、もちろん行きたい。でもたとえ大学が私を受け入れるとしても、大学に行って何をするのか、それについて心配。勉強できないし、わからない。基礎がないから。」(事例M)

以上、高卒大学受験タイプの進路決定について分析した。前述した高卒大学未受験タイプは、国立大学を中心に受験するため、受験時期も遅く、2月、3月に集中している。それに対し、高卒大学受験タイプに該当する事例のほとんどは、秋から受験活動を始めている。このタイプの留学生の多くは、絶対ではなく、できれば国立に行きたいと語っていたが、自分の日本留学試験の成績や経済的なことを考慮し、募集が早い時期から始まる私立大学も受験する。私立に合格した場合、国立大学の受験にチャレンジする事例もあれば、国立を断念し、合格した大学に進学を決める事例も見受けられた。また、大学以外にも、専門学校に進学した事例も存在している。さらに、日本語学校での勉強がうまくいかず、日本での進学をあきらめ、帰国した事例もある。

5.3 大専卒タイプの進路決定

本節では、大専卒タイプに該当する事例について分析していく。結論から言うと、次節で分析する4年制大学タイプも含め、本稿での4つのタイプのうち、進学の際に最も苦勞しているのは大専卒タイプである。このタイプに該当する4事例は、大学院への進学と大学への進学希望とが半々に分かれていたが、実際の進学結果では、大学に進学したのは1事例のみであり、専門学校に進学したのが2事例、そして在学中に結婚し、退学した事例が1事例あった。以下詳細に分析していく。

事例Pは最初年齢的なことを強く意識し、できれば大学院に進学して早く学歴を取得したいと語っていた。しかし、大専の学歴で受験できる大学院は極めて少ないため、大学院への進学は無理だと判断し、大学を受験した。

事例Nはもともと大学進学を志望しており、そして事例Oは大学院への進学志望を語っていた。この2事例は日本語学校卒業後、専門学校に進学した。まず、

事例Nは専門学校への進学理由について以下のように語っている。

「この頃、経済危機で、資格とか持っていなかったら、大卒でも就職が難しい。学歴だけでは足りないと思うようになってきた。大企業でもいつか倒産するかもしれない。リーマンみたい…」(事例N)

「そうですね、技術が大事だと思う。国内は車も多い。日本製の車も。車の修理なら仕事もすぐ見つかると思う。大学卒業して、サラリーマンになるのもそんなに面白くないし、私に向いてないかも。車の修理なら稼げそう。」(事例N)

事例Nは大専を卒業後、就職でかなり苦勞していた。もともと日本で4年制の大学学歴を取得し、いい仕事を見つきたいと計画していた。しかし、来日後、学歴よりも資格のほうが実用的だと思うようになり、専門学校への入学を選んだ。

事例Nとは違って、事例Oは来日前、日本語の成績が良かったという。それで日本でできれば国立大学の大学院に行きたいと考えていたが、来日後、留学試験での成績が伸びず、国立への進学は難しいと自分で判断した。また私立は学費が高く、経済的に余裕がないことも一要因であったという。日本語学校の先生や友人から、学部への進学も勧められたが、事例Oは年齢的にも悩んでいる様子が窺える。

「もう一回大学に入ったら、4年間もかかるから、卒業したらもう30近く。やはりもう一回大学行くのは無理。でもこのまま帰ると、学歴もなく、お金たくさん出したんだから、専門に行って、あと2年間稼いでから帰りたい。」(事例O)

前節で確認したように、このタイプに該当する事例は、大学・大学院への進学を希望している。なかでも、中国の大専で日本語を3年間勉強していた留学生は日本語に自信を持っているため、国立大学・大学院に進学希望が集中していることが読み取れた。しかしながら、実際の進学状況から、このタイプに該当する事例が進学に非常に苦勞していることが明らかになった。

留学生の語りから、大専から直接大学院に進学できる大学院が少ないこと、また大学院の募集は学部の募集とは異なり、学校によって試験の方法や内容もそれぞれ違うため、どの大学に受験したらいいのか、どうやって受験準備をしたらいいのかなど、受験する際に

苦勞していることが分かった。

さらに、大学院受験の際だけではなく、学部を受験する際にも、大専卒タイプに該当する留学生は苦勞している傾向にある。なぜなら、多くの学部を受験する際には、日本語だけでなく、英語、数学などの試験もある。高校を卒業してから一定の期間を経ていたため、「高校で学んでいた数学など知識はほとんど忘れていた」(事例P)と語る事例も多い。そのため、大学を受験する際に、高卒の留学生に比べ、結果的に彼らの受験は不利である。

このように、大学院に進学する際にも、大学学部に進学する際にも、大専卒タイプに該当する留学生は非常に不利な立場に立っていることが明らかになった。

5.4 4年制大学タイプの進路決定

最後に、4年制大卒タイプに該当する事例の進路決定を分析する。このタイプに該当する6事例は全員大学院への進学を希望していたことが前章で確認されたが、実際の進学先は大学院だけでなく、多様な進路決定の様態を呈している。具体的には、大学院の正規課程に進学したのが2事例で、研究生として入学したのが1事例である。そして、1事例は大学学部に進学し、1事例は専門学校に進学した。さらに、このタイプにおいても、日本での進学をあきらめて帰国した事例が存在している。

まず、事例Rと事例Wは、計画した通り1年間の日本語学校を経て大学院に進学した。彼らは進路決定について、特に苦勞せず、願書を出して受験したら合格したと語っている。

そして、大学院の正規課程ではなく、研究生として入学した事例もある。事例Tは何校かの大学院を受験したが、全て不合格だった。もともと一年間日本語学校に在籍する予定だったが、次の進学先が決まらないため、日本語学校の在籍期間を延長し、来年度に大学院を受験すると考えていた。

「なかなか学校が決まらない。私立とか、学費もあまり出せないし、入学金とかも含めて、初期費用は100万かかる。私立はやっば無理。日本語学校の在籍を延期して、来年国立を受験するしかない。」(事例T)

日本語学校の在籍期間延長の手続きをした後、ある大学の大学院研究生の審査を合格したため、日本語学校を退学し、その大学の大学院研究生として入学し

た。しかし事例Tはその大学を受けるつもりがないという。それなのに研究生として進学したのは、学費が安いこと、授業時間が少ないことといった経済的な側面が理由となっている。

「どうせ正規生が無理なら、日本語学校より研究生のほうが学費が安いし、授業も少ない。その期間にアルバイトをいっぱいして、学費を貯めればいい。」(事例T)

次に、大学に進学した事例を見ていこう。事例Uは事例Tと同時期に来日し、彼も大学院を受験したが、不合格だった。研究生になる選択もあったが、彼の場合、研究生になるか、比較的に入りやすいと思う学部に入るかと悩んだ末、学部への進学を選んでいる。

「研究生は1年、2年もかかるし、大学に入ったほうが今(筆者補足：日本語学校)より勉強できる。将来の就職にも有利だと思う。あとは大学なら、みんな受験の準備をやっているし、なんとなく受験について情報が取れる。なんか大学院は面倒、まあ、誰に聞けばいいかわからないし、自分ひとりでやっているみたいな感じ…」(事例U)

大学院の進学が決まらなかった事例Sは、大学院への進学しか考えていない。彼は日本語学校にすでに1年間半在籍していた。翌年度に受験するためには、1年間日本に滞在できる在留資格を確保しなければならない。彼は、専門学校に在籍しながら大学院受験を続けるという方法を選んだ。

「どうしようと思って、先生のアドバイスで、うちの校長はビジネススクールの専門学校も持っていて、「ビジネスのほうにもちょっと通ったら」って言われたので、一応ビジネス科に入った。」(事例S)

以上のように大学院への受験が決まらない場合、留学生は研究生になったり、学部・専門学校に入学したりすることで、進学先を確保するといった傾向が見られた。一方、進学をあきらめて帰国した事例もあった。

事例Vは国際的に有名な私立大学の大学院への進学を目指していた。日本語学校の在籍1年目は、受験した大学院は全て不合格だった。2年目も1年目と同様、夏から受験活動を始めていた。しかし、時間が過ぎただけで、進学先がなかなか決まらないという。事

例Vは「来る前には日本の教育についてよくわからないし、国内なら完全に成績で進学が決まるよ。やっぱり違う。」と語っているように、彼は大学院受験の準備に悩んでいた。

「もう疲れた。大学院入試について、それぞれ(筆者補足：日本語学校の先生と留学生の友人)の話が違う。教授に連絡したほうがいいとか、教授が書いた本を全部読まないとダメとか…とにかく、大学院入試は、試験よりも、その裏にあるものが大事だと思う、難しい。こんなに難しいとは思っていなかった。」(事例V)

さらに、過ぎた時間を強く意識していることも読み取れる。

「そろそろ2年が過ぎた、まだ大学院に進学できていない。これからたとえ大学院に進学したとしても、また2年間かかる。大学院に進学するためにこんなに時間かかるなんて思わなかった。年齢的にも中国に帰らないとね、就職も厳しい。」(事例V)

このように、事例Vは2年間かけて大学院を受験したが、進学先を確保することができなかった。日本語学校の卒業とともに、彼は帰国し、母国で就職活動に着手しているという。

以上、4年制大卒タイプの進路決定について分析した。事例Vが「大学院入試について、それぞれの話が違う」と語っているように、受験準備の際、留学生が獲得できる情報も限られていることが分かった。また、事例Uも「大学院の受験は学校によって全然違うから、どの学校に合格できるかはわからない」と語っているように、大学院への受験に戸惑う留学生が多く、苦勞している留学生も多数存在していることが明らかになった。

6 考察

本稿では、日本語学校に在籍している留学生の進学を事例として取り上げ、留学生の日本における進学の問題を、インタビュー調査から得られたデータをもとに分析した。以下、結果をもとに考察を述べたい。

(1) まず、留学生の日本における進学意識の形成については、先行研究の検討でも触れたように、多くの先行研究では、留学生の日本における進学意識の高

さを示していたが、その留学生の進学意識の経緯まで検討されてない。本稿では来日前の学歴別に進学意識の形成経緯を分析したことにより、先行研究と同様に、留学生の日本における進学意識の高さを確認したうえで、それぞれの学歴別の留学生の日本における進学意識の形成の多様性も明らかにした。さらに、多くの留学生は日本の大学は進学しやすいという意識を持つことや、進学希望は国立大学や有名な私立大学に集中していることも明らかにした。

- (2) また、留学生の進路決定についてほとんど検討が及んでいない現状の中、本稿は4つのタイプに沿って、それぞれのタイプの留学生の進路決定について分析した上で、留学生の大学進学にまつわる困難さがあることも明らかにした。本稿で明らかになったように、留学生の日本における進路決定に関しては、全体としてみれば、多くの事例は来日前の進学希望を変更しながら進学先を決定していく傾向が見られた。その中で、特に順調に志望する大学に進学できたのは、高卒大学未受験タイプに該当する事例のみである。それ以外のタイプの多くの留学生の受験活動は、順調ではないことが明らかになった。留学生の進路決定の際、志望する学校に失敗した場合、妥協しながら何らかの学校に進学していく傾向も見られた。しかしながら、本稿の分析でみたように、ほとんどの留学生は確かに日本語学校を卒業後に進学を達成したが、必ずしもその進学先で学歴を取得するのではなく、志望する大学や大学院等に再受験するために専門学校に進学している場合もあることを明らかにした。

本稿で明らかになったように、少数の恵まれた留学生を除き、多くの留学生は進学する際に、さまざまな困難を抱えている。また、留学生が抱えている困難は学歴別によって異なっている。特に大学院に進学したいと語る大専卒タイプと4年制大卒タイプに該当する事例の多くは、受験活動で多くの挫折を経験していることが分かった。彼らが受験活動で戸惑ったこととして、大学院受験についての情報の足りなさや受験準備の曖昧さなどが挙げられる。

なお、本稿での分析結果は先行研究で検討した山田(2010)の研究結果と異なる部分も多いことを提示しておきたい。山田(2010)では、留学生が日本の大学などを受験する際に、一大学のみを受験しており、複数の大学を受験しない傾向があることが示されていると指摘されている。しかし本稿においては、受験費用など経済的理由で受験校数を控えている留学生も存在

するが、一方、多くの留学生は進学先を確保したい、「いい」大学にチャレンジしたい等の理由で多数の学校を受験する傾向が見られ、一校のみを受験する者は極めて少ない。本稿ではその理由として、地方と東京の状況の相違が大きく関係しているのではないかと推測しているが、なぜ結果的にこのような相違が生じているのかについて、より実証的な研究が必要となる。

冒頭で述べたように、世界各国は近年、優秀な人材確保などの目的で留学生受け入れに力を入れており、留学生の受け入れを国家戦略として策定している。留学生を奪い合う時代が到来しつつある今日において、優秀な留学生を日本に誘致するためには、より充実した進学支援を含めた魅力的な留学生の受け入れプログラムが必要となるだろう。その際に、留学生を一枚岩的に捉えるのではなく、例えばそれぞれの学歴別の留学生が抱えている困難に目を向け、それに対応した進学支援の検討に力を入れていく姿勢が、日本の大学にとっては求められているのではないだろうか。

最後に本稿の限界と課題について触れておく。本稿で得られた結果は、これまでの留学生研究ではほとんど触れられてこなかった日本語学校に在籍する留学生の進学問題について考察したものであるが、あくまで少数の対象者の語りから得たものである。本稿での結果を一般化するために、より事例を増やして質的分析を進めるとともに、量的検証もすすめるべきだろう。今後はこうした限界を乗り越え、それぞれの学歴の留学生が日本で進学する際にはらむ諸課題を検討していく必要がある。

付記

本稿は2010年度提出した修士論文『私費留学生の進学意識の形成と変容に関する研究——日本語学校に在籍する留学生へのインタビューを手がかりにして』の一部を大幅に加筆・修正したものである。

引用文献

- 浅野慎一(1997)『日本で学ぶアジア系外国人——研修生・技能実習生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版。
 独立行政法人日本学生支援機構(2010)「平成21年度私費外国人留学生生活実態調査概要」<http://www.jasso.go.jp/scholarship/ryujchosa21.html> (2012年9月12日閲覧)
 独立行政法人日本学生支援機構(2011)「平成21年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data10_d.html (2012年9月12日閲覧)

- 独立行政法人日本学生支援機構 (2012) 「平成22年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11_d.html (2012年9月12日閲覧)
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2012) 「平成23年度私費外国人留学生在籍状況調査結果」 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html (2012年8月9日閲覧)
- 萩原滋・岩男寿美子 (1988) 『日本で学ぶ留学生——社会心理学的分析——』 勁草書房。
- 久村研 (2002) 「多文化教育環境におけるカリキュラムの研究——日本語学校就学生に対する進路希望調査を中心として」 田園調布大学『紀要34』, pp.111-133.
- 文部科学省 (2002) 「留学生交流関係施策の現状等について (資料編)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-2.htm (2012年8月28日閲覧)
- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 (2008) 『「留学生30万人計画の骨子」』 <http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.p> (2012年8月28日閲覧)
- 文部科学省高等教育局学生・留学生課 (2010) 『我が国の留学生制度の概要——受入れ及び派遣』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/12/12/1286521_4.pdf (2012年8月28日閲覧)
- 新田功 (2007) 「オーストラリアのIDPによる留学生数の将来予測: Global Student Mobility 2025より」 横田雅弘 (研究代表) 『留学生交流の将来予測に関する調査研究』, 平成18年度文部科学省先導的大学改革推進経費による委託研究, pp.118-125.
- 岡益己・深田博己 (1995) 『中国人留学生と日本』 白帝社。
- 佐藤次郎 (2007) 「就学生制度の現状」『IDE・現代高等教育』 IDE大学協会2007年10月号, pp.19-22.
- 山田陽子 (2010) 『中国人就学生と中国帰国子女——中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語』 風媒社。

(指導教員 本田由紀教授)